《論　説》

# 『雨月物語』の怪異が意味するところ

中田　妙葉

秋成の怪異に対する意識や理解を論じるとき、決まって引用される、『胆大小心録』の一節である。

儒者と云人も、又一僻になりて、妖怪はなき事也、とて翁か幽霊物かたりしたを、終りて後に恥かしめられし也。狐つきも癇性かさま〳〵に問答して、おれはとこの狐しや、といふのしや、人につく事かあらふものか、といはれたり。是は道に泥みて、心得たかひ也。狐も狸も人につく事、見る〳〵多し。又きつねても何ても、人にまさるは渠か天禀也。さて、善悪邪正なきか性也。我によきは守り、我にあしきは祟る也。狼さへよく報ひせし事、日本紀欽明の巻の始にしるされたり。神といふも同しやうに思はるゝ也。よく信する者には幸ひをあたへ、怠れはたゝる所を思へ。仏と聖人は同しからす。人体なれは、人情あつて、あしき者も罪は問さる也。此事神代かたりにいひたれは、又いはす。

秋成が「幽霊物かたり」をし、儒者の中井履軒から「妖怪はなき事也」「人につく事かあらふものか」等と言われて、「恥ずかしめられ」たことがよほど悔しかったようである。その後の文にも、同じような記載がある。

履軒は兄とちかふて、大器のやうにいふか、これもこしらへ物しや。老か幽霊はなしをしたら、跡て、そなた

はさつても文盲なわろしや、ゆう霊の狐つきしやのと云事はない事しや、狐つきといふは、皆かん症やみしや、と大に恥しめられた。

「幽霊はなしをしたら」履軒に「文盲」だと貶められ、「ゆう霊の狐つきしやのと云事はない」狐つきというのは全て「癇性病み」が現れただけだと否定され、「大に恥しめられた」と前の一節と同じ様に悔しがっている。

これらの記載は、秋成の怪異信仰や幽霊はなしや狐つきへの大いなる興味がわかり、さらに、超自然的な現象に対してかなり理解を持っていたことが伺い知ることができる資料である。かつ「ある程度は、その存在を認めていたふしがみられる[1]」と、断定は避けつつも、踏み込んだ認識をする研究者もいる。

## 一

履軒の反応に注意してみよう。「幽霊はなし」をした秋成を、「文盲」呼ばわりし「わろし」と非難している。つまり秋成の活動領域である上方の知識人社会においては、怪異は「なき事」であり、怪異話は物事に暗い、物を弁別する智力がない者が取り上げる話題、という認識だったのであろう。ただ、秋成が積極的に「幽霊はなし」をしようと思ったということは、怪異という事象は口に出す事すら恥ずかしいという程のものではなかった、ともいえる。秋成の話しぶりが余程真剣だったのだろう、彼がその「幽霊はなし」を心から信じているということが伝わったからこそ、履軒は「大に恥しめられた」と秋成が地団駄踏んで悔しがるほどに、扱き下ろしのだろうと思われる。

短い記載ではあるが、秋成のその激しい口調と言葉から、その場の情景が浮かび上がってくる。秋成は幽霊や狐つきなどの怪異や異界の存在を認めており、そして儒者の履軒達にもその存在を認めさせたいという強い思いで話

をした、ところがその話しぶりが履軒には、疎ましく感じられたのではなかろうか。ただの冷やかし程度の話しぶりであれば、「兄とちかふて、大器のやうにいふ」履軒が「さま〳〵に問答」したであろうか。

また、秋成は気持ちを込めて、真剣に話をしていたからこそ、その気持ちを鼻から相手にせず、根本から否定した履軒に、「恥しめられた」という悔しい思いをしたのではなかろうか。その真剣な思いとは、怪異や異界という存在とその理解が大切であることを、履軒達に理解させたかったのではないだろうか。

異界の存在を信じ、怪異は幻想ではないという認識を持っている秋成が執筆したからこそ、『雨月物語』が怪異好み、興味本位で書かれた作品だとは読者に思われないのである。また、怪異を表現するために書かれたとも思われない。作品の主題はあくまでも人間性の描写であり、秋成は気質物などで取り上げられる類型とは一線を画した、人間性の深淵を捉えその表現をせんがために怪異を取り入れた。さらに秋成の学識と才筆に裏打ちされて『雨月物語』が結実したといえる。怪異の作品における意味について、「ごく一部の作品を除けば人間の執着……激しい人間の愛と苦しみからくる執念であることが分かってこよう。そして、題材にとられた怪異は、これらの執着、執念を表現する手段として用いられているのである。[2]」というのは良く言われている事である。鷲山樹心氏は『秋成文学の思想』のなかで、『雨月物語』に怪異を取り入れた真意について次のように述べている。

世の中には人間のこざかしい知恵のみでは測りおおせぬ不可知の領域があり、人はこの領域との交渉を知覚し得る場合があること、世間の学士（特に儒者）のなかには、狭隘な合理主義をもってその領域の存在を単なる幻覚としてあたまから否定する者があることに対して、反証をこころみようとしたところにあったと解すべきであろう。…（中略）…しばしば養父母の口から聞かされた自分の性命に対する神霊の加護という教訓は、その後も彼の意識の深層に、人智を超え、理論を超えた不可思議な宗教経験的事実として深く印象されたに相違

ない。そして、そのような情操は、そのまま仏教の境地に対する情操にも通行する。たとえば『雨月物語』の「白峰」や「青頭巾」のように、怪異幻妖の月乾坤の虚構のなかで、人間の魂と仏教の不可思議なかかわりが真摯に追求されるに至ったのは、秋成の精神構造のなかにおいては、むしろ自然の帰趨であったと考えられるのである。(3)

『胆大小心録』は秋成晩年の随筆集であるため、『雨月物語』の執筆時には、秋成は異界や怪異に対して「その領域の存在を単なる幻覚としてあたまから否定する者」には「反証をこころみようと」する程の熱量で、その存在と領域の重要性を認識していたとは言い切る事はできない。しかし、少なくとも怪異を書くために筆を執ったわけではなく、あくまでも怪異は表現の手段という媒介にすぎなく、秋成の筆は人間性の描写を狙って、怪異を作品に積極的に取り込んだのである。

よく秋成の怪異について述べるとき、しばしば秋成がどの様に異界を信じるようになったかという事が論ぜられる。鷲山氏も「もし、『雨月物語』執筆のころの秋成に霊界の存在を心底から信じる心があったとすれば、彼自身の心にそれを培養したのは、彼自らが体験した数奇な出生とその生いたちの過程を通して自覚した、あの目にえぬ他の力の存在、すなわち宿業・宿命とも呼ぶべきものの存在であったと考えられる」(4)と、彼の生い立ちに絡めて考察を進めており、此処を原点とする説が一般的である。しかしながら、秋成が霊界の存在を如何にして信じるようになったか、というのは余り意味のない議論だと、筆者は思っている。

秋成の怪異世界を述べるとき、多くの研究者は霊界を信じるようになった経緯を明かそうとする。しかし、作者がどのような切っ掛けを持って、その入り口にたったとしても、肝心なことは向き合い方である。重要なのは、秋

成が、霊界や怪異をどの様に捉えているか。彼の人生観や思想へどの様に影響し、関わりっているのか。どの様な意図を持って作品に取り入れたのかであって、その経緯というのは、作品理解には必要性に乏しいと思うのは、筆者だけであろうか。現代人は異界・霊界を、非科学的としてその存在自体に否定的なので、秋成が霊界・異界の存在を信じているということが、まるで作者の価値、その作品の価値を落とすように思うのであろうか。それ故、秋成が霊界や異界を信じるようになったかということに理由付けをすることで、その怪異に説得力をもつと思うのだろうか。しかしながら、秋成の視点や思考をみるとき、彼は、怪異というものが、人間に重要な視点となると認識していたと思われる。また、「信仰」という特別なものではなく、霊界は自然界の一部として当たり前の存在であると、考えていた。太陽が昇って朝が訪れ、落ちると夜が訪れるように、私たちのすぐ側にある、と言うくらいの存在だと認識していたように思われるのである。

それでは、秋成はどの様な意味・意図を持って、怪異・異界を『雨月物語』作品に取り入れていたか、考察をすすめよう。

## 二

『雨月物語』では、一見様々な怪異表現が使われているようであるが、その怪異の類型は「死霊」、「生霊」「異類」の三つに分類できる。更に『雨月物語』の全九作品の怪異表現とその対象を照らし合わせてみると、表現内容ごとに怪異が選定されていることがわかる。

次に怪異表現の分類に基づいて、それらの怪異が作品において何を表現しようとしていたのかを、考察していこう。まずは、最も多い怪異形態の「死霊」からみてみる。

(1)　死霊

ここに含まれる作品は、「白峰」「菊花の約」「浅茅が宿」「仏法僧」「吉備津の釜」の五作品である。これら作品中に、秋成はこの「死霊」という怪異を通して、人の「怨念」や「怒り」を表現している。ただし、「怨念」や「怒り」は様々であり、作品ごとに異なる「怨念」や「怒り」を表現していると思われる。以下にそれらの「怨念」や「怒り」が作品ごとにどの様な表情をもっているのかを検討していこうと思う。

「死霊」作品は、更に二種類の形態に分けられる。一つは全体が怪異形態となっている作品、つまり怪異が作品の主体構成となっているものである。「白峰」「仏法僧」がこれに当たる。

「白峰」は四国讃岐の真尾坂の林（今の香川県坂出市玉越町の水尾坂）まできた西行が、この里に近い白峰にある崇徳院の御陵に、拝み申し上げようと白峰に登ったところから話が始まる。そこに崇徳天皇の霊が現れ、西行との対話を中心に物語が展開する。崇徳天皇の死霊が現れて物語が始まり、死霊が消えると共に物語が終わる構成なので、必然的に物語のほぼ全体が怪異となる。最も単純で典型的な怪異形態と言えるだろう。謡曲「松山天狗」から構想を得て、『撰集抄』『保元物語』『山家集』などが典拠となっている。

崇徳院陵のわびしさに、人の世の宿世のはかなさが身にしみて、西行は夜通しで供養をしようと読経をする。心を込めて。涙と夜露でその袖を濡らしながら、回向を続けると、喜んだ崇徳院が亡霊となって現れる。それを見た西行は涙を流しながら「いかに迷はせ給ふや。濁世を厭離し給ひつることのうらやましく侍りてこそ。今夜の法施に随縁したてまつるを、現形し給ふはありがたくも悲しき御こゝろにし侍り。ひたふるに隔生即忘して。仏果円満の位に昇らせ給へ」と心を込めて諫める。しかし、崇徳院は声高く笑返答するには、「近来の世の乱は朕なす事な

り。生てありし日より魔道にこゝろざしをかたふけて、平治の乱を発さしめ、死て猶朝家に祟をなす。見よ〳〵やがて天が下に大乱を生ぜしめん」と崇徳院は生前魔道に心を専念し平治の乱を起こさせ、死後もなお、朝廷に祟っていることを明かす。「魔道」とは、「我執や怨恨のつよさによって、成仏せずに激しく他に祟る魔となる事。天狗道」[5]、「この世に恨みをもって死んだものや、破戒僧などが、その執念によって天狗道に入り、天狗道の苦患を受けて逃走を事とし、魔力をもってこの世に乱を起こすことができるようになったものをいう」[6]のである。

西行は保元の乱の動機について訪ねると、崇徳院は天皇家への深き恨みを述べ、孟子の革命理論を用いて正当づけようとするのに対して、西行は王道の理を持ってそれを諫め、応戦する。その論争を通じて、秋成の史観と国家観という思想が述べられるという仕組みになっている。我が国の古代精神の神髄と儒教本来の姿とを、「王道」において見ると、「一人の人欲をもってわたくしすべきものでもなければ、又、孟子的な易姓革命の思想をもってこれに立ち向かうべきものでもない」[7]。だから「いかに革命が天命に応じ民望に順うものであると説いてみたところで、所詮は人欲からでたばかりにすぎないという結論がこの次に来る。その前提として、ここでは主に、新院の口から、保元の乱の原因と背景についての正当化が主張され」[8]る必要があった。

西行は、その古く直き神ながらの道こそまた儒教の本義に直結するものであると説いているが、これは儒教の孟子革命論を信奉して、おのれの行為を正当化しようとする新院を説得する最上の方法であった。新院は西行の意見にある程度の妥当性を認めざるをえなくなり、次には「今事を正して罪をとふ、ことわりなきにあらず」と、西行の説くところに一理あると認める。西行の条理を尽くした説得に、崇徳院は激昂を治めて、理性を取り戻したかに見えた。ところが、我が身の罪深き行為への懺悔として「五部の大乗経」を写し都に送ったところ、「呪詛の心にや」と写経を送り返されことをから、後白河帝への怨恨を述べるうちに、ますます怒りを募らせ、ついに陰火とと

もに、魔王の姿をあらわす。「猶嗔火熾にして尽ざるまゝに、終に大魔王となりて、三百余類の巨魁となる。朕けんぞくのなすところ、人の福を見ては転して禍とし、世の治るを見ては乱を発さしむ」と復讐の鬼と化した崇徳院は、これらの人々を次々と取り殺し、やがては平氏の滅亡をも策していると語る。しかし、西行の仏縁へ導く歌に、崇徳院は穏やかになり、姿もかき消えた。西行は山を降りその夜の事を誰にもいわなかった。果たして、崇徳院の予言通り、平家一門は西海に滅んだ。人々は崇徳院を怖れ、その陵を畏怖して崇めるようになったという。

魔道に志したのは、ひとえに後白河帝と平家への怨恨である。その崇徳院の怨恨の激しさを、死霊だけでなく陰火や天狗の相模などを効果として書き入れる。死霊となった崇徳院は死んで更に怨恨を募らせ、復讐の鬼と化していることを作品は物語る。「所詮此経を魔遠に回向して、恨をはるかさんと、一すぢにおもひ定て、指を破り血をもて願文をうつし、経とゝもに志戸の海に沈てし後は、人にも見えず深く閉こもりて、ひとへに魔王となるべき大願をちかひしが、はた平治の乱ぞ出きぬる」と、朝廷を亡ぼし、一族を亡ぼす深い激しい怨恨であるが、その怨恨には因果の法則がはたらいている事を、物語は示している。それ故、崇徳院がどんなに恐ろしい「朱をそゝぎたる龍顔に、荊の髪膝にかゝるまで乱れ、白眼を吊あげ、熱き嘘をくるしげにつがせ給ふ。御衣は柿色のいたうすゝびたるに、手足の爪は獣のごとく生のびて、さながら魔王の形あさましくもおそろし」い姿を目の当たりにしても、西行が「君かくまで魔界の悪業につながれて、仏土に億万里を隔給へばふたゝびいはじ」と一見突き放したように見えても、最後には「よしや君昔の玉の床とてもかゝらんのちは何にかはせん　　刹利も須陀もかはらぬものを」と、西行の感情が高まり溢れて、ただ崇徳院の成仏を祈りたくなるようような、不憫な切なさと同情を崇徳院の死霊には感じずにはおられないのである。

次に「仏法僧」をみてみよう。

伊勢の豪農の拝志氏は、隠居を機に剃髪をし、名を夢然と改め、末っ子の作之治を連れて旅を楽しんでいた。高野山を訪れたものの、旅人に宿を貸さないということを知らず、霊廟の前で野宿をする羽目になってしまった。闇夜になり、高野山で切腹させられた豊臣秀次とその家臣達の亡霊の一行に出会う。紹巴から高野山の玉川の歌の考証を側で聞いたり、秀次の前で一句披露するよう命じられるなど、亡霊の一行に紛れ込み一晩すごした。

「白峰」同様、剃髪した者と死霊が一夜をかけて、その霊廟の前で相対峙する話であり、「八島」などの修羅物の謡曲を構成に取り入れられている。とはいえ、「白峰」のような激しい怨念が引き起こす怪異の世界とは二分する、全く異なる性質の怪異である。秀次一行は、修羅の苦を受ける刻限になり、はじめて死霊らしい様を、夢然親子に感じさせる。

淡路と聞えし人にはかに色を違へて。はや修羅の時にや。阿修羅ども御迎ひに来ると聞え侍る。立せ給へといへば。一座の人々忽面に血を淮ぎし如く。いざ石田増田が徒に今夜も泡吹せんと勇み立躁ぐ。秀次木村に向はせ給ひ。よしなき奴に我姿を見せつるぞ。他二人も修羅につれ来れと課せある。老臣の人々かけ隔たりて声をそろへ。いまだ命つきざる者なり。例の悪業なさせ給ひそといふ詞も。人々の形も。遠く雲井に行がごとし。

秀次は自身の姿を見せてしまった事から、夢然親子を修羅道へ連れて行こうとするが、老臣達に「例の悪業なさせ給ひそ」と諌められて思いとどまる。確かに、右記に記述する秀次の思いつきは、彼の悪行をうかがわせる言動の一端として表現されている。しかし、一行の宴席に同席していた夢然親子は、彼らが死霊だというのを、歌を詠むよう命じられるまで気づかない。紹巴から「殿下と申奉るは関白秀次公にてわたらせ給ふ。」と聞き、はじめて死霊の一行という事を認識するに至るのである。

作品中、唯一怪異らしい場面となる修羅道の表現であるが、それも形式だけが必要であったかのようで、いたってあっさりした表現にとどまっている。中村博保氏は

修羅道とは六道の一つで、生前の瞋恚・憍慢・疑心等の業因によって永遠の闘争をしいられる世界をさすとされている。謡曲の修羅物は、この修羅道に堕ちた人間の闘争の苦患を通して、魂の安らぎを失った武将の人間像、或いはその悲劇的な情熱を描くことを主題としている。ここに描かれている秀次は、いわば修羅物のシテに共通する人間的苦悩をいささかも感じさせない全くの恐怖像として描かれている。このことは能の形式を借りて主題を構成した「白峰」とは異なって、この作品においては秀次一行の出現に動機を与え、或いは現実に隣接する阿修羅の世界の存在を示すために修羅物の形式だけが借りられていたことを示している。(9)

「白峰」と対照的な、およそ怪異とは思えないような、やもすると人間世界において展開されているような色調の怪異が、この「仏法僧」作品の特色といえよう。勿論、引用した一段には、秀次一行の怨念が表現されており、高野山で起こった秀次一行の秘話を思い起こさせる。しかしながら、秋成がこの作品において意図したことの一つには、「玉川の歌」の解釈のような知的関心事を、「そらごと」のモティーフとして作品化する方法(10)」を成り立たせることにあったとみるのが自然であろうと思われる。

では、この作品の怪異はどの様な役割をしていたのだろうか。高野山という地を基点にこの世の様と変わらない死霊の一行としての表現は、「現実に隣接する阿修羅の世界の存在を示す」ことを意味している。怒りを募らせた者達が陥る阿修羅などの霊界は特別な世界ではない、私たちが居るこの世のすぐ側に存在している、ということを感じさせてはいないだろうか。

## 三

さて、「菊花の約」「浅茅が宿」「吉備津の釜」は、部分的な怪異形態である。これらの作品において、怪異は、死霊の抱く恨みや怒りを表現するべく箇所に取り入れられている。

まずは「菊花の約」からみてみよう。

播磨国加古の儒者の左門は、病気に苦しむ出雲松江の出身の武士赤穴宗右衛門の看病を通し、「ひとつとして相ともにたがふ心もなく」二人は義兄弟の契りを結ぶ。回復した赤穴は本来なすべき主君の復讐を果たすべく出雲へと旅立とうとする。惜しむ左門は強く帰りを請い、赤穴は九月九日の重陽の節句には戻ってくることを約束する。九日当日、夜になっても赤穴は姿を現さない。ついに諦めて左門が家へ入ろうとするその時、ぼんやりした影に赤穴の姿が現れる。果たしてそれは、赤穴の死霊であった。赤穴は出雲に着いてから、主君の敵の尼子経久から仕官の誘いを受けるが、拒否したことで尼子は宗右衛門の従兄の丹治に命じ、彼を幽閉させる。

賢弟が菊花の約ある事をかたりて去んとすれば。経久怨める色ありて。丹治に令し。吾を大城の外にはなたずして、遂にけふにいたらしむ。此約にたがふものならば。賢弟吾を何ものとかせんと。ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。いにしへの人のいふ。人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆくと。此ことわりを思ひ出て。みづから刃に伏。今夜陰風に乗てはる〳〵来り菊花の約に赴。この心をあはれみ給へといひをはりて泪わき出るが如し。今は永きわかれなり。只母公によくつかへ給へとて。座を立と見しがかき消て見えずなりにける。

幽閉された赤穴は、左門との約束を果たすべく、死ねば一日に千里を行けるといわれる事を思い出し、自害した。

霊魂となって、その信義を貫いたのである。赤穴はそう告げ終わると、かき消えてしまった。

約束を交わした当人が約束を果たすために、自害してまで約束を守ろうとすることで、「信義」の重みを見事に伝える表現手法は、中国白話小説『古今小説』「范巨卿鶏黍死生交」を典拠とする。この作品の見どころであり、最大の山場であるといえる。

さて、赤穴の死霊からは、激しい怨恨よりも、「此約にたがふものならば。賢弟吾を何ものとかせんと。ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。」という焦燥感が強く表れている。最初の一行「経久怨める色ありて。丹治に令し。吾を大城の外にはなたずして、遂にけふにいたらしむ」には、幽閉した尼子と丹治への怒りを感じられる程の表現はないものの、その怒りは左門にうつる。左門は儒者でありながら、宗右衛門の仇討ちをしようと決意する。出雲の丹治を訪ね、魏の公叔座に故事を説くと、信義を貫くべく一刀のもとに丹治を斬り殺した。この豪胆な行動に導いたのは、正しく宗右衛門の亡霊が起こさせたものに他ならない。

二つ目の作品は「浅茅が宿」である。

下総国葛飾の真間で、生業の農業を嫌がっていた勝四郎は、一攫千金の絹の商売をするべく京へ向かう。京で妻は死んだものと過ごしていたが、七年目に畿内に戦乱が起こると、妻宮木のことがしきりに思い出されて、真間へ帰る。すると、死んだと思っていた宮木は、一人心細い思いをしながら勝四郎を待っていた。二人は互いの思いを語り合い、床についた。次の日、宮木の姿は見えず、家は廃屋と化していた。そこで初めて勝四郎は妻の死を覚る。興味深いのは、勝四郎は妻の死霊と寝ていた事に「夜の霊はこゝもとよりやと恐しくも且なつかし」と、恐怖を感じると同時に、懐かしくも感じていることである。

宮木の死霊は勝四郎への恨みを言うために、現れる。「「今は長き恨みもはれ〳〵となりぬる事の喜しく侍り。逢を待間に恋死なんは人しらぬ恨みなるべし」と、又よゝと泣」く。待っていた長い間に感じていた恨みを、勝四郎にその心を解ってもらいたかったと、素直に言い表す。もし自分の心を相手にわかってもらえないとすれば、それは大変情けない事だと、死霊になって訴える。正しく恨みを言うために、現れた死霊だが、そこに怒りは見られない。勝四郎に逢うことをただただ待ち焦がれて死んでいったという、その気持ちを伝えたい一心であらわれた。そんな宮木の死霊には、恐ろしさよりも、懐かしさや、不憫な思いが募るのである。

三つ目の作品は「吉備津の釜」である。

吉備の国賀夜の正太郎と吉備津神社の神主の娘の磯良は、吉備津の釜占いで凶と出たにもかかわらず、婚姻は進められた。もともと身持ちの悪い正太郎は、遊女の袖を囲って家に帰らない。父に座敷牢に入れられると、磯良を騙して金までだまし取り、袖と駆け落ちしてしまう。磯良は恨みのあまりに病に伏すと、生霊となり袖を取り殺ろす。

何となく脳み出て。鬼化のやうに狂はしげなれば。こゝに来りて幾日もあらず。此禍に係る悲しさに。みづからも食さへわすれて抱き扶くれども。只音をのみ泣て。胸窮り堪がたげに。さむれば常にかはるともなし。窮鬼といふものにや。古郷に捨し人のもしやと独むね苦し。

また、変わり果てた姿で正太郎に会い、復讐を告げる。

あるじの女屏風すこし引あけて。めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせまいらせんといふに。驚きて見れば。古郷に残せし礒良なり。顔の色いと青ざめて。たゆき眼すざましく。我を指たる手の青く

ほそりたる恐しさに。あなやと叫んでたをれ死す。

正太郎は陰陽師から四十二日間は厳重な物忌みをするよう忠告されると、家の戸口に札を貼り、自身の体にお守りの文字を書くなどして身を守る対策をする。磯良の死霊は、お札のせいで家に入る事ができない。四十二日目の夜明けに、助かったと思った正太郎は、隣の彦六と再会しようと戸を開けた。その途端、正太郎の絶叫がきこえ、戸口には生々しい血がながれ、軒先に髻がひっかかっていた。

其夜三更の比おそろしきこゑしてあなにくや。こゝにたふとき符文を設つるよとつぶやきて復び声なし。おそろしさのあまりに長き夜をかこつ。……既に四更にいたる。下屋の窓の紙にさと赤き光さして。あな悪や。こゝにも貼つるよといふ声。深き夜にはいとゞ凄しく。髪も生毛もこと〳〵く聳立て。しばらくは死入たり。……彦六用意なき男なれば。今は何かあらん。いざこなたへわたり給へと。戸を明る事半ならず。となりの軒にあなやと叫ぶ声耳をつらぬきて。思はず尻居に座す。……明たる戸腋の壁に腥々しき血潅ぎ流て地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば。軒の端にものあり。ともし火を捧げて照し見るに。男の髪の髻ばかりかゝりて。外には露ばかりのものもなし。浅ましくもおそろしさは筆につくすべうもあらずなん。夜も明てちかき野山を探しもとむれども。つひに其跡さへなくてやみぬ。

この作品には、死霊だけでなく生霊も登場する。しかしどちらも激しい恨みと怒りを抱く怨霊である。そして磯良が死霊となり姿を正太郎の前に現した際に、読者と主人公の視点が一致する表現「我を指たる手の青くほそりたる」や、正太郎の物忌みの時の、夜ごとに増す恐ろしい死霊磯良の「声」による表現「其夜三更の比おそろしきこゑしてあなにくや。こゝにたふとき符文を設つるよとつぶやきて復び声なし」や、「下屋の窓の紙にさと赤き光さして。あな悪や。こゝにも貼つるよといふ声。深き夜にはいとゞ凄しく」などが臨場感を煽り、磯良の執念深さと

怨念の激しさを克明に描き出す。これらの畳みかけるような怪異表現は、磯良の姿が見えないからこそ想像をかき立て、恐ろしさに正太郎と共に身を縮こませる。しかしながら、磯良の恐怖表現がこれほど卓越していても、正太郎に同情する読者はほぼいないであろう。正太郎は自業自得であり、致し方ないこと取られるのがおちである。読者の目は、卓越した怪異表現を通して、女性の怨念や執念の恐ろしさに向けられると同時に、恨みをこのような復讐という手立てをとるしかない境遇に置かれてしまった、磯良への深い悲しみにも向けられるのである。

## 四

### (2)　生霊

まずは、「生霊」とはどういう状態をさすのかを説明しよう。鷲山樹心氏は『秋成文学の思想』のなかで、左記のように説明している。

秋成は『雨月物語』の「蛇性の婬」に、女と化した蛇の物語を書いているが、この場合も蛇の外に女はなく、女となった時に蛇はいない。蛇はまぎれもなく女に変身したのである。これらに対して「夢応の鯉魚」の興義は夢裏に鯉となったと思ったが、実は意識不明の興義の躰は三井寺に在った。鯉になった興義が今殺されると知覚した瞬間に、三井寺の病躰は意識を取り戻した。鯉は実際に殺されて膾にされ、少なくともその過半を人々に食われてしまったが、それで興義の躰が食われたわけではなかったのである。これを要するに、鯉に化したのは興義自身ではなく、興義の霊――生霊――であり、しかもそれは鯉に変身したのではなく、実在の鯉に乗り移ったのであった。客観的には興義と鯉とは同一ではなく、明らかに「二」であったのであり、……釣りあげられて今にも殺されると知覚するまでの興義の霊と鯉はまさしく「不一不二」であったのである。し

たがって、秋成によって描出されたかかる不思議な現象は、従来の解釈のごとく、変身の原理や正夢の観念をもって解明される性質のものではなく、その拠るところはまぎれもない「生霊」の観念であったと私は考えるのである。……当時においては、人間のたましいは深くもの思うにつけその身を離れてあくがれ出で、もの思うあまりにさまよい憑くものと一般に信じられていた。(11)

この観念を扱った作品で、代表的なものが『源氏物語』の六条御息所である。葵の上に六条御息所の生霊が乗り移ると、御息所の声も姿も、さらには心までが葵の上に現れるような表現がなされている。ところが御息所の身は六条邸にあり、自分の生霊が夢心地のなかにあくがれ出て、葵の上のもとに行ったことを、はっきり承知しているのである。そうして、『雨月物語』にも、正しくこの箇所を典拠としたのが、「蛇性の婬」で真名子が富子に憑いた場面、「富子即面をあげて。古き契を忘れ給ひて。かくことなる事なき人を時めかし給ふこそ。こなたよりまして悪くあれといふは。姿こそかはれ。正しく真女子が声なり。」である。

先の「吉備津の釜」にも見られる。袖に取り憑いた磯良の生霊も、真名子の生霊同様に、怨み辛みを意中の男性に訴える為にあらわれている。それは右に挙げた六条御息所の表現が鮮烈で、生霊として表現するイメージが固まってしまったからと考えられるが、『雨月物語』の「夢応の鯉魚」では、この典型的な生霊表現とは違なり、恨みを表現することを目的としていない。

三井寺の画僧興義は、病気にかかり、七日を経て亡くなるが、三日後蘇生する。その間病躰を離れ、放生の功徳を積んでいたため、興義の霊は一尾の鯉に乗り移り、鯉と共に限りなく琵琶湖を逍遙する。この間の行動は鯉魚の習性に従いつつも、その魚の心は興義のものであった。つまり興義は生霊として鯉に乗り移っていたのである。鯉魚として遊泳する楽しみを享受していた矢先に、激しい空腹を感じた興義は、神の警告を破って、文四の釣り糸に

かかり、平の助の家で調理されそうになる。興義は「我くるしさのあまりに大声をあげて。仏弟子を害する例やある。我を助けよ〳〵と哭叫びぬれど。聞入ず。終に切るゝとおほえて」夢から覚めた。

先に「生霊」を部分的な怪異表現として「吉備津の釜」と「蛇性の婬」中に、怨念の表現として用いられている事を述べた。それに対し「夢応の鯉魚」は、「生霊」が物語の主体となる表現となっている。「生霊」が作品全体の怪異表現となっているのは、この作品のみである。更に、「生霊」という怪異表現を用いて表しているのは、「吉備津の釜」や「蛇性の婬」で用いられているような怨念ではなく、立ち位置の転換である。「生霊」という手段で、他者の立場になりその気持ちが理解できるのである。興義は鯉魚になる事で、琵琶湖で逍遙する楽しみを味わったが、同様に激しい空腹から、餌に引きつけられる。しかし自身は僧侶という理性がはたらく「其餌はなはだ香し。心又河伯の戒を守りて思ふ。我は仏の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも。なぞもあさましく魚の餌を飲へきとてそこを去。」しかしながら、やはり空腹には勝てず、上手くやれば大丈夫だろう。釣られることはない、と高を括る。「しばしありて飢ます〳〵甚しければ。かさねて思うに。今は堪がたし。たとへ此餌を飲とも嗚呼に捕れんやは。もとより他は相識ものなれば。何のはゞかりかあらんとて遂に餌をのむ。」心は興義であるため、知り合いだから大丈夫だろうという都合の良い考えももたげた。しかし、その身は鯉魚であるから、釣られてしまってからは、どの様に口を開こうが「仏弟子を害する例やある。我を助けよ〳〵と」哭叫べど、調理の者には聞こえない。包丁でさばかれる恐怖まで味わって、蘇生したのである。それまでは悠々と遊泳する鯉魚をただ羨ましく思っていた興義であるが、生霊となって鯉魚の生き様を体感することで、飢えの苦しみやさばかれる時の恐怖まで理解する事となったのである。

## 五

### (3)　異類

さて、最後は人でなく、異類が変化(へんげ)した作品を「異類」とした。ここに含まれる作品は、「青頭巾」「蛇性の婬」と「貧富論」の三作品である。

一つ目の作品は「蛇性の婬」である。

白蛇の化身である真名子は、網元の次男坊の豊雄に惚れ込み求婚する。ところが、豊雄は真名子のせいで様々な事件に巻き込まれ、ついに当麻の酒人に、真名子の正体が白蛇だと教えられる。これを退治するには、豊雄がますらを心を持つ以外にはないと諭される。熊野に帰った豊雄は、芝の庄司の家に婿に入るが、妻富子に嫉妬した真名子は、生霊となって富子を取り憑き殺してしまう。また、彼女を捉えようとする鞍馬寺の僧侶も毒気で殺してしまう。兎にも角にも、意中の豊雄との仲を裂こうとする者を、ことごとく排除し、ただひたすら豊雄への愛に邁進していく白蛇の化身真名子。しかしながらその執拗さ故に、豊雄には恐れられ、最後は愛する豊雄に袈裟で押し伏せられ、道成寺の蛇塚に埋められてしまう。

蛇の「蛇性」に「邪性」を掛け合わせ、蛇の執拗という性格を「愛情」に重ねて表現した。この構想は、中国の白話小説『警世通言』「白蛇子永鎮雷峰塔」から引用している。人間であれば、その執拗な愛情に恐怖を覚えるところを、蛇ならではの「邪性」を怪異表現としたものである。ただし、作品中では真名子は雅な女性として表現されているため、唯一蛇として描かれている箇所「かの蛇頭をさし出して法師にむかふ。此頭何はかりの物ぞ。此戸口に充満て。雪を積たるよりも白く輝々しく。眼は鏡の如く。角は枯木の如。三尺余りの口を開き。紅の舌を吐

て。只一呑に飲らん勢ひをなす」が、恐ろしさを際立たせている。

二つ目の作品は「青頭巾」である。

大中寺の院主が美童に狂い、その童子が亡くなるやその悲しみにその肉を食べてしまった。それ以来食人鬼となって村人に脅威を与えてきた。院主は元来人であるが、作品に登場したときにはすでに「食人鬼」となっていることから、「異類」として分類した。

高徳の僧快庵禅師は、この麓の村を偶然訪れ、この院主の話をきき、救済を思い立って大中寺に一夜の宿を請う。院主は夜中に食人鬼の正体をあらわし、その肉を食そうと快庵を探し回るが見つからない。この物語の最も盛り上がる怪異であり、話の展開が変わるポイントとなっている。

あるじの僧眠蔵を出て。あはたゝしく物を討ぬ。たづね得ずして大いに叫び。禿驢いづくに隠れけん。こゝもとにこそありつれと禅師が前を幾たび走り過れども。更に禅師を見る事なし。堂の方に駈りゆくかと見れば。庭をめぐりて躍りくるひ。遂に疲れふして起来らず。夜明て朝日のさし出ぬれば。酒の醒たるごとくにして。禅師がもとの所に在すを見て。只あきれたる形にものさへいはで。柱にもたれ長嘘をつぎて黙しゐたりける。禅師ちかくすゝみよりて。院主何をか歎き給ふ。もし飢給ふとならば野僧が肉に腹をみたしめ給へ。あるじの僧いふ。師は夜もすがらそこに居させたまふや。禅師いふ。こゝにありてねふる事なし。あるじの僧いふ。我あさましくも人の肉を好めども。いまだ仏身の肉味をしらず。師はまことに仏なり。鬼畜のくらき眼をもて。活仏の来迎を見んとするとも。見ゆべからぬ理なるかな。あなたふとゝ頭を低て黙しける。

快庵の徳の高さに感銘を受けた院主は、自身の救済を求める。果たして、快庵は院主に自らの青頭巾をかぶら

せ、証道歌の二句の解釈を課題にして去る。一年後、快庵が大中寺を訪れると、院主はか細い声で証道歌を唱えている。快庵が一喝して禅杖で打ち据えると、「忽氷の朝日にあふがごとくきえうせて。かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとゞまりける。」院主の体は氷が打ち砕かれるように消え、青頭巾のみが残った。

「蛇性の婬」同様、愛情に執着したことから、人が鬼に変化した物語である。この二つの物語に共通するのは、彼らはこの世に存在するものの、人間世界のルールや正常な領域を逸してしまっている存在であり、それが、様々な怪異を引き起こす原因となっている。

最後の作品は「貧福論」である。

蒲生家に仕える岡左内という武士は、「いと偏固」な性格で、金銭を集める事を大変好み、富貴になることを願う心が世間一般の武士とは違って強かった。ある夜、左内の元に黄金の精霊が訪れる「其夜左内が枕上に人の来たる音しけるに。目さめて見れば。燈台の下に。ちいさげなる翁の笑をふくみて座れり。……翁いふ。かく参りたるは魑魅にあらず人にあらず。君がかしづき給ふ黄金の精霊なり」。黄金の精霊は、日ごろの金銭への誤解の鬱憤を話し出す。経済の道は国家経営の道である事。近頃の武士は清貧を尊重する余り、このことを蔑ろにしているなど。そして、左門が貪欲な不徳の人に金が集まる由縁を訪ねると、金銭は無情であるから、これを大切にする者に、集まるのであって、モラル如何は関係ないことを教える。

この物語は、岡左内と黄金の精霊との金銭をめぐる対話という形式をとり、経済論・金銭論を展開している。怪異と言うのは、甚だ金銭の精霊があらわれる、という一点であり、恐怖を感じさせる表現は一切ない。「数言興尽て遠寺の鐘五更を告る。夜既に曙ぬ。別れを給ふべし。こよひの長談まことに君が眠りをさまたぐと。起てゆくや

うなりしが。かき消て見えずなりにけり。」最後には、大変楽しそうに、眠りを妨げた事を詫びて居なくなる。何ら人間と変わらない感覚をもっている、精霊である。しかしながら、この話も他の二作品と同じように、この世のルールとは異なる感覚や思考を知らしめている。大凡、普通の人間には思いつかないような理論なのではないだろうか。ここに、「異類」という怪異の特色が出ているように思われるのである。

## 六

ここまで『雨月物語』の怪異表現を三種類に分け、表現する内容とその形式が関係するか如何を考察してきた。『雨月物語』に最も多い怪異である「死霊」は、主に怨恨や怒りを表すものではあるが、その恨みというのも、崇徳院のように激しくも悲しい怨恨であったり、宮木のように愛おしい恨みであったり、また、激しくも悲しい怨恨であっても、磯良の恨みは、崇徳院とはまた異なる様相をもつ。人間の抱く複雑な恨みや怒りを、「死霊」という媒介を駆使し、様々な意味合いや色調で各作品それぞれに表現するのである。また、「生霊」は、自分の感情や思考を持ちつつ他の体に取り憑く事により、他の環境を理解することができる。これは、他人を理解する事にもつながる表現形態となっている。最後の「異類」は、恨みや怒りというよりも、この世に存在していながら、人間のルールに従えない、またはそのルールの外で生活をせざる得ない存在、そして当たり前と思っていた社会の常識やモラルとは別の視点を投げかける存在として、秋成は登場させている事がわかる。

つまり、秋成は人間の感情、思念などの心の変化や動きを表現するに、怪異を駆使することで、それら心象風景をみえやすくすることを考えた。また自分が当たり前と思ってることに対して、他の視点や視角を持って見つめ直すことも、怪異を物語に取り入れることによって、平易な表現が可能になる。唯物論者は、霊界は見えないから存

在しないという。しかし、人間の内面・心というものも見えないものである。見えないけれども確かに存在する。それは霊界と同じである。

（1）浅野三平著「解説　執着――上田秋成の生涯と文学」（『雨月物語　癇癪談』新潮日本古典集成第二十二回、新潮社、一九七九年）二四八頁。
（2）同左。
（3）鷲山樹心著『秋成文学の思想』法蔵館、一九七九年、四〇頁。
（4）同左。
（5）高田衛校注・訳『雨月物語』（『英草子　西山物語　雨月物語　春雨物語』小学館、一九九三年）三三四頁。
（6）鵜月洋著『雨月物語評釈』角川書店、一九七八年、五一頁。
（7）同左、五九頁。
（8）同注6五九頁。
（9）同注6同注6、三八三頁。
（10）同注6三七三頁。
（11）同注3、二九二頁。

『雨月物語』の原文は、中村幸彦代表編『上田秋成全集　第七巻』中央公論社、一九九〇年に拠った。
『胆大小心録』の原文は、中村幸彦代表編『上田秋成全集　第九巻』中央公論社、一九九二年に拠った。

――なかた　わかば・東洋大学法学部教授――